

〔明德記下〕土丸ノ城ハ、懸テ合戰ナン共有ベシ、サラバ紀伊國ノ根來ヘ入進ラセヨトテ、正月○明
年 四日ノ暮程ニ、根來ヘ入進セタリケリ、

〔南遊諸州めぐり紀伊〕かだは民家千軒有と云、富人多し、此邊名草郡也、かだの先に淡島あり、是に
も民家多し、かだと淡島は民屋つゞけり、○中 賀田の北の出崎を和田の崎と云、賀田淡島の前は

入海也、此地佳景也、西國の商船泊る、遠江などをのりて、江戸奥州に行舟は、苦が島とかだの間を
通り、又苦が島の外をも通る也、淡島の前は港よからずといへども、旅船の纜を繋ぐ所也、淡島か

だの邊より阿波國もむかひに近く見ゆ、今宵はかだに宿す、旅舎は二階にて海にのぞめり、前に
客船多く、むかひに辨才天の山をばたちて青く茂り、おきに苦が島二ながらはるかに見ゆ、風景
よし、此所にかだめとて、わかめの名物有、めづらし、

〔紀伊國名所圖會三下〕松江○東松江中松江西松江あり、紀の川の湊口より西の方本の脇までの

○中略 夫此地の風色たるや、北は峨々たる青山、日景を含で金碧の色を醸し、南は渺々たる蒼
海、月明を浮べて、琉璃の光を磨けり、松江の松の常盤なる、冬の霜を凌ぎ、白濱の沙の鮮明なる、夏

の雪ともうたがへり、千維の都城は、雲外に聳へ、二子の島渚波際に浮む、遠く水天の窮まる際を

望に、阿土アトの二國は一刷の翠黛たり、范蠡が舟常に維がす、子陵が釣もいとまなし、されば月に感

あり、雲に興あり、沙にひろふては、松露の羹に酔をす、め濱にとりては、あさり貝のあさからぬ
まで、風流俗子のわいだめなく、四時にかねぬ遊地なるべし、

〔日本書紀神武〕天皇○中 帥軍而進至熊野荒坂津亦名丹敷浦 因誅丹敷戸畔者、

〔南紀名勝略志牟婁郡〕錦浦

那智ノ庄、渚ノ宮村ノ南ノ海濱、長サ十二三町ヲ云也、載日本書紀荒坂ノ津ト有、又

〔丹敷浦考〕紀に丹敷浦とあるは、今の二木島ニキジマの事なりと思はる、にしきとにきしと音近ければ